



喜多の埜

〜 終戦六十年 〜

いよいよ今月十五日でもって、終戦から六十年の節目を迎えます。いまま戦争を目の当たりにされた世代の方々にとっては辛苦の思いが悲しく蘇る忌まわしき日でもありません。

古来、六十年は一つの節目であり、還暦という言葉があらわすように、**原点に立ち返るべき年**ともいえます。この節目の年にあたって、我が国を見渡せば、中国、韓国との歴史認識問題、憲法九条の問題、北朝鮮の核開発など諸外国との問題をはじめ、国政の将来への不安、不況による雇用問題、若年層の無気力傾向の悪化、凶悪犯罪の多発、自然災害の続発、超高齢化社会問題、国債の過剰債務等の**内政の問題**と、我が国は物資には恵まれてはいるものの、**国家としては瀕死の状態**であるといっても過言ではないでしょう。

しかし、いまから**六十年前**、**私たち日本人はそれ以上に打ちのめされた状態**でした。国土は焦土と化し、労働力となる人間は傷も癒えず、産業基幹は灰燼と帰し、国家は無きも同然の**聞くも無残な状態**でした。しかし、私たちの祖父母は痛みに耐え、そしてわずか十数年で世界有数の経済国家に育て上げ、**次代を担う私たちまでも育てあげました**。

この無上の御恩に報いるには今の状況の打破を、私たちが行っていくなくてはなりません。幸いにも建物はあり、技術者もあり、物資の心配ありません。**あとはヤル気だけです**。戦後六十年。焼け野原に返った気持ちで**祖父母への御恩をかえしたい**ものです。

靖国問題によせて

今年も首相の靖国参拝がマスコミに取り沙汰されています。違憲だの、戦争美化だのと、様々な意見が飛び交っています。そもそも、靖国神社にお参りする事が**何故問題になるのか**。政教分離の原則に反するというのなら、寺院も教会もお参りしてはダメでしょう。でも、寺院教会への追悼のお参りは誰も問題視しません。不思議な話です。では靖国神社は**何がそんなにネックなのか**、それは**A級戦犯**がお祀りされているからだといわれています。

A級戦犯とは「**平和に対する罪**」として極東軍事裁判で裁かれた方々に対する罪名ですが、原爆を使用した国にそのような裁判を行う権利がどこにあるのか、裁判が行われていた当時から疑問の声はあがっていました。

そもそもA級戦犯とされた方々は**昭和二十八年八月三日の衆議院本会議**で与野党一致で完全に**名誉回復**されています。つまり、A級戦犯なるものは**日本国に存在しない名称**であり、日本人自身がそう呼称する事自体、**遺族の方々に対して大変な失礼**にあたります。

靖国神社自体は、日本人の神觀念から生まれた、**戦没者の御霊を慰め、平和を願う霊地**として鎮座されたものであり、亡くなられた方々は「**靖国で会おう**」と生前誓い合っておられます。それを後世の私たちが分離するのだの、別に追悼するのだの、安らかに鎮まっておられる**霊魂を引きちぎるような暴虐**は、**日本人の神道信仰の歴史にない愚行**です。

日本人自身の信仰を外圧に負けて変えるような日本国では、グローバル化の世界で笑われる事を**靖国神社の御霊は警告**しています。

当神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ボーダフォン

対応確認済み。



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

